

## 選考委員コメント一覧

### 饗庭伸委員長（東京都立大学）

本助成事業は、今回で30回目という節目の年を迎えました。30年間変わらず、多数の高い質の活動が提案され続けたこと、それらがワンパターンに陥ることなく、その時代ごとの課題に鋭敏に反応した先駆的な活動が提案され続けたことは素晴らしいことで、我が国の市民主導の住まい・まちづくり活動の分厚さ、奥深さを物語っていると思います。

今回の助成には、住まい活動、コミュニティづくり活動あわせて145件の応募がありました。例年のことですが、「これだけの素晴らしい活動をしている団体を落選させていいのだろうか」と悩みながら審査をいたしました。

審査は住まい活動、コミュニティづくり活動それぞれとも5人の合議で行っています。ほぼ満場一致で選ばれたものもありますが、昨年と同様に「全員の視点が一致」ではなく「何人かの視点が一致」して選ばれたものも多くあります。高齢化の様相が複雑化し、地球環境への問題意識や手法も広がっています。移民や障害を持つ方などの暮らしの可能性が広がる一方で、格差が拡大し、私たちの手によるセーフティネットの構築も求められます。こうした課題群を「住まい」や「コミュニティ」を使ってどう解いていくか。すべての課題を解決することなど出来ないわけですが、何人かの視点が一致して選ばれたものは、その尖った問題意識が評価されたということです。

なお、一審査員としては、一つ一つの確実な活動を通じて、自分たちだけでない、周辺の「知らない人たち」を巻き込んでいこう、とする活動を高く評価しました。そういう活動が、市民主導の住まい・まちづくり活動をより分厚く、奥深くしていくと考えているからです。

選考された団体は、いずれも重要な課題に取り組むものばかりで、現地での展開が楽しみなものばかりです。大きな成果を期待したいと思います。

### 黒瀬武史委員（九州大学）

皆様から応募頂いた提案書を拝見し、社会が大きく変化するなかで、住まいとコミュニティに対するニーズの変化を実感しました。なかでも、一般的な行政の枠組みではサポートできていない方々や状況に向き合い、工夫を重ねて人や居場所を生み出そう、支えようとされる取組が強く印象に残りました。コロナ禍を経て、日常生活圏の居場所に目を向けた取組も数多く提案いただきました。

同じ悩みを抱える地域は少なくありません。応募団体の皆様が、財団の交流会を通して、様々な知恵を共有いただき、少しずつでも地域の課題を解決する緒が生まれることを願っております。

### 竹沢えり子委員（銀座街づくり会議）

従来あった課題が、コロナ禍で顕在化したのか、「居場所づくり」「孤立」という言葉が目

につきました。高齢者、子供、生活困窮者、外国人その他、この社会で居場所をなくしている方々が多くいることに改めて気づかされました。どの活動も逼迫した課題に答えを見出そうとする意義ある活動であると感じました。そんな中、地域の資源を生かし、多面的なものの方の見方、独自の工夫によって、多様なプレイヤーを巻き込むことで活動を広げ、コミュニティづくりにつなげているような活動に着目しました。選考の過程で感じさせられることは、テーマや視点はよくとも、本当に地域の人たち自身が切実性をもった課題なのか、実現性はあるのか、継続していけるのか、という点がしっかりしていなければならない、ということでした。

今回の助成によって一つのプロジェクトが完成しそれで終わり、というのではなく、活動が継承されていくことを願っています。

### **原田陽子委員（福井大学）**

コロナ禍にも関わらず、全国各地からの興味深い活動提案がたくさんあり、とても勇気づけられました。

一方で、例年、住まい活動助成では、「空き家」の改修とそれに付随するイベント的な企画に関する応募がとても多いのですが、改修を通して、地域に対して、日常的に、どのような創造的な機能や人的な繋がりをつくらうとしているのかが重要だと思っています。

また今年度は、空き家改修以外でも、いくつかのユニークな活動が見られましたが、活動内容に独自性を持ちつつも、先進性があり、他地区への波及効果が期待できる活動を評価しました。

いずれにしても、コミュニティ活動助成よりも住まい活動助成の応募件数は毎年少ないのですが、「住まい」を狭く捉えずに、日常的な住環境の改善に繋がる、地に足の付いた、多様な申請内容が、今後多数出てくることを期待したいです。

### **樋野公宏委員（東京大学）**

住まい活動助成には似た活動テーマが多く集まります。例えば、地域で増加する「空き家」の活用、地域で孤立しがちな人々の「居場所」づくりなどです。人口減少に伴って増加する空き家への対応、多様な背景を持つ人々の包摂が地域を問わず課題となっていることの表れと言えるでしょう。しかし、選定する活動テーマに多様性を持たせたい選考委員にとって、これはとても悩ましい状況です。私は、類似する活動のなかでもキラリと光る独自性、計画通り進めば他地区の模範となるであろう先導性があることを重視しました。残念ながら選に漏れた団体の皆さんには、選定された団体との違いをこうした視点で確認して、また挑戦していただきたいと思います。

助成対象に選ばれた団体の皆さんにおかれましては、おめでとうございます！今年こそ皆さんの地域にお邪魔して、直接お話ができることを楽しみにしています。

### **渡邊義孝委員（風組・渡邊設計室）**

コミュニティ活動助成部門においては、「居場所づくり」という言葉が、多くの申請団体によって語られていました。

不況だけでなく、パンデミックによって、地域の様々な紐帯が失われ、関係性が希薄になっている中で、それぞれの取り組みが、どれもかけがえのないものに見えました。重い課題と向き合う団体であればあるほど、その書面からは、困難と格闘する肉声が聞こえる気がしました。

本年度の選考過程においても、私たちがその熱意にいかにかえられるか、それを真剣に議論しました。「いま、そこでなければできないこと」が明確な団体が今回の対象となったと感じます。

一方で「ずっと地道に続けてきた活動」にもできるだけ助成すべきだという声も強く、絞り込みは困難な作業でした。

残念ながら選外となった団体には、「献身的な人格やユニークな提案が読み取れても、肝心の地元の住民の主体的な関わりが見えにくい」「世代や性別が偏りがち」という特徴がありました。持続的な活動のためにも、地域の多様な人びととの協働に取り組んでいただけたら、と願っています。

### **松本昭委員（ハウジングアンドコミュニティ財団）**

今年も、全国から地域への想いが詰まった145件の応募を頂きました。この中から20件余を選ばせて頂く作業は、タフで責任のあるものです。

そこで、私は、申請書をしっかりと読み込み、そこから、現場の生き活きとした活動風景を具体的にイメージすることに力を注ぎました。そのため、活動内容が抽象的なものより、活動内容と到達目標が明確で、多くの住民が主体的に関わることがはっきり解る活動、助成金の使途が活動の持続性に寄与するものを評価しました。また、活動団体の利益（共益）より、地域社会の利益（公益）を図る活動を優先して選考させて頂きました。

ここ数年は、限界集落や限界離島など地域の存続をかけた活動、空き家や廃校など利用を放棄したストックを地域総出で活用する取り組み、孤独な孤立を深める社会的弱者に寄り添う活動など「待ったなしの活動」もその割合を増していますが、一方で、コミュニティを高めながら、地域の個性や誇りを育て磨く活動など共感を覚えるものも多数ありました。

財団の公募助成事業も今年で30年を迎えます。この間、財団は、市民やNPO団体の自発的な地域づくり、住まいづくりの活動を支援することを社会的使命としてきました。来年度も本活動助成事業に関するセミナーや相談会等を開催する予定です。今回、僅かな差で選に漏れた応募団体におかれましては、ぜひ来年度も再チャレンジをして頂ければ幸いです。皆様の大きいご活躍を期待したいと存じます。